

令和七年度  
入学試験  
第一回午前

国  
語

令和七年二月一日

京華女子中学校

※解答用紙は本冊子にはさんでいます。



【問題は次のページから始まります】

□ 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- ① 式服をチャクヨウする。
- ② 卒業アルバムがカンセイした。
- ③ 収穫しゅうかくした米がアマっている。
- ④ イキオいをつけて走り出す。
- ⑤ ヒガンの初勝利をやつと手に入れた。
- ⑥ カイコウ一番痛い所を突ついてきた。

問二 ①～⑥の——線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① 梅雨前線が活発化している。
- ② 高層ビルが林立りんりつしている副都心。
- ③ 商品の値段ねだんが上がった。
- ④ 首相しゅしょうの側近しやくきんに話を聞く。
- ⑤ 日本は治安しぜんの良い国である。
- ⑥ 友人の意見を尊重そんじゆうする。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

訂正<sup>ていせい</sup>するとは、一貫性<sup>いっかんせい</sup>をもちながら変わっていくことです。難しい話ではありません。ぼくたちはそんな訂正する力を日常的に使っているからです。

この点でうまいなと思うのは、ヨーロッパの人々です。彼ら<sup>かれ</sup>を観察していると、訂正する力の強さに X を巻かざるをえません。

新型コロナウイルス禍<sup>か</sup>を思い出してください。イギリス人の「訂正」にはすさまじいものがありました。大騒ぎ<sup>おおさわぎ</sup>してロックダウンをしたと思いきや、事態があるていど収まると、われ先にマスクを外していく。「自分たちはもともとコロナなんて大したことないと感じていた」と言わんばかりです。「いや、そうだったかな」と思わずにはいられないですが、彼らはあたかもそれが当然だったかのように振る舞<sup>ま</sup>います。

日本人からすると「ずるい」と感じるかもしれません。スポーツでもしばしばルールチェンジが問題になっています。

それでもヨーロッパの人々はルールを容赦<sup>ようしや</sup>なく変えてくる。政治でも同じです。たとえば気候変動。少しまえまでドイツは、「脱原発<sup>だつげんぱつ</sup>」や「二酸化炭素排出量<sup>はいしゅつりょう</sup>の削減<sup>さくげん</sup>」を高らかに掲<sup>かか</sup>げていました。ところがウクライナで戦争が勃発<sup>ぼつぱつ</sup>しロシアからの天然ガスの輸入が途絶<sup>とだ</sup>えると、「やはり原発と石炭火力も必要だ」と言い出す。

これまで観光業<sup>注4</sup>でさんざん稼<sup>かせ</sup>いできたフランスも、最近<sup>注1</sup>はオーバーツーリズム<sup>注2</sup>を懸念<sup>けんねん</sup>し、「地元<sup>注3</sup>コミュニティと環境保護<sup>かんきょうほご</sup>のために観光客数<sup>注4</sup>を抑制<sup>しやくせい</sup>する」という新たな方針を打ち出しています。華麗<sup>注5</sup>な方向転換<sup>てんかん</sup>です。

ただ、ここで大事なものは、そのときに彼らが自分たちの行動や方針が一貫して見えるように一定の理屈<sup>注5</sup>を立てていることです。それはある意味でごまかしですが、そういった「ごまかしをすることで持続しつつ訂正していく」というのが、ヨーロッパ的<sup>注6</sup>な知性<sup>ちせい</sup>のありかたなのです。

ヨーロッパの強さは、この訂正する力の強さにあります。それはきわめて保守的<sup>注7</sup>でありながら同時に改革的な力でもありま

す。ルールチェンジを頻繁ひんぱんにすることによって、たえず自分たちに有利な状況じょうきょうをつくり出す。それなのに伝統を守っているふりもする。それはヨーロッパのずるさであると同時に賢かしこさであり、したたかさなのです。

日本にも訂正する力がないわけではありません。

昔からよく指摘ししてきされているように、大陸の辺境注8に位置するこの国注9は舶来はくらいのものに「Y」がありません。中国に接したら中国の文化を受け入れ、欧米おうべいがきたらこんどは欧米の文化を受け入れる。それは野放図注10なようできて、じつは肝心かんじんなところはまったく言っていないほど変えていない。

たとえば名前です。朝鮮半島ちようせんやヴェトナムでは中国文明の輸入とともに命名も中国風に変えてしまいました。他方ぼくたちはいまだに古い名前を保持しています。

<sup>注11</sup>科挙も採用していません。日本語をローマ字化する運動も潰つぶれました。なによりも天皇制が続いている。日本は、信念なくすべてを外国に合わせているように見えて、ひどく頑固がんこで根底でずっと一貫している国でもある。つまり、改革に開かれているように見えてきわめて保守的な国でもあるわけです。

日本は日本でしたたかだったということです。ただ、ぼくたちはその先人たちの力ちからを忘れ、うまく使えなくなっています。

どうすれば訂正する力を取り戻もどすことができるのでしょうか。

身近な例から考えてみましょう。現代日本で改革の障害となっているのは、つねに「空気」、つまり社会の無意識的なルールです。

<sup>注12</sup>この空気なるものは、みなが他人の目を気にするだけでなく、同時に気にしている他人もまた他人の目を気にしているという入れ子の構造をもっているのです、とても厄介やくがいです。たとえば、コロナ禍が終わってもマスクをなかなか外せないという話題がありました。これは、単純に周りのひとから「マスクをしろ」という圧力をかけられ、怖こわいというだけの話ではありません。もしかしたら、周りのひとと本音ではマスクを外したいのかもしれない。けれども、彼らが「他人がどう思っているかわか

らないから、まだ外すのは控えよう」と思っているかぎり、自分だけマスクを外すわけにはいかない。実際にはみなマスクを外したいと思っていたり、無意味だと感じていたりしたとしても、相互の監視が存在するためにだれもが社会の無意識的なルールにしたがってしまう。これが空気の問題です。

その結果、いつまで経ってもだれもマスクを外すことができない。と思いきや、ひとたび一部のひとがマスクを外し始めれば、こんどは逆に、花粉症などでマスクが必要なひを含め、だれもが外さなければいけないような気持ちにされてしまう。その変化の切れ目がなんなのか、われわれはわからないし、またそれをコントロールすることもできない。

このような厄介な構造をもつ規範意識を、どのようにしたら「訂正」できるのでしようか。

空気については、評論家の山本七平による『「空気」の研究』がコロナ禍で再注目されました。1977年に刊行された本ですが、昔から日本人は空気に支配されているという文脈で引つ張り出されたわけです。

ところがこの本を読み返すと、じつは空気という言葉は、いまのような相互監視という意味では使われていません。

同書を中心になっているのは「臨在感的把握」と呼ばれる現象です。ふつうの学問的な言葉で言うと、ある種のフェティシズムです。日本人はアニミズムとフェティシズムが強いから、たとえばいちど「コロナが悪」ということになったらみなそれぞれを呪物のように扱ってしまい、あまり議論ができなくなるといふことです。

「山本七平が」と喧伝されているわりに、山本七平は実際はその話をしていない。これは今回確認してみても虚を衝かれました。戯画的に言えば、『「空気」の研究』の内容さえも空気で決まってしまうている。

(東浩紀『訂正する力』による)

## 注

- 1 オーバーツーリズム……ある地域に観光客が過度に集中して混雑し、さまざまな問題が生じること。
- 2 懸念……気にして不安に思うこと。心配。
- 3 コミュニティ……利害を同じくする共同体。地域社会。
- 4 抑制……おさえ、とどめること。
- 5 理屈……納得かつとくできる論理。
- 6 知性……物事を知ったり考えたり、判断したりする能力。
- 7 保守的……考え方や行動に、昔からの習慣や方法などを重んじる傾向けいこうがあるさま。
- 8 辺境……中央から遠く離れた国境。
- 9 舶来……外国から船に乗せて運ばれてくること。
- 10 野放図……際限のないこと。また、しまりがなくないこと。
- 11 科挙……中国で行われた官吏登用のための資格試験。
- 12 入れ子の構造……全体と部分が同じ形をもつ構造。
- 13 規範意識……法や道徳など、行動や判断の基準を守らなければならないという意識。
- 14 フェティシズム……人工物や簡単に加工された自然物を呪物とみなして崇拜すうはいすること。
- 15 アニミズム……自然界の様々なものに靈魂れいこんや精霊せいれいなどの存在を認めそれを信仰しんこうすること。
- 16 喧伝……しきりに言いふらして、世間に広く知らせること。
- 17 虚を衝かれ……弱点や無防備なところにつけこまれる。
- 18 戯画的……風刺ふうしをこめて、おかしくおおげさにすること。

問一 X・Yにあてはまる語を次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目   イ 血   ウ 舌   エ 骨

問二 — 線部① 「『ずるい』と感じるかもしれません」とありますが、それはなぜですか。「から」に続くように、本文中から十九字で抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

問三 — 線部② 「華麗な方向転換」とありますが、フランスが「観光客を抑制する」と方向転換したのはなぜですか。本文の内容をふまえて、三十五字以内で答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

問四 — 線部③ 「その先人たちの力」について、次の(Ⅰ)・(Ⅱ)の間に答えなさい。

(Ⅰ) 「その先人たちの力」とはどのような力ですか。本文中から五字で抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

(Ⅱ) 「その先人たちの力」を使った結果、どのようなようになったと考えられますか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ヨーロッパのように、ずる賢くしてたかになった。
- イ 何の信念も持たないまま、全てを外国に合わせて変えるようになった。
- ウ 一貫して変化することがなく、きわめて保守的になった。
- エ 自分たちの方針をごまかすことが得意になり、改革的な力を持った。
- オ 外国の文化を受け入れたが、肝心なところはほぼ変えずにすんだ。

問五 —— 線部④「厄介」について、何がどのような点で「厄介」か説明した次の文章の A ・ B にあてはまる語句を

本文中からそれぞれ指定字数で抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

「空気」は、人々が A・四字 を気にするだけでなく、その他人もまた A・四字 を気にするという構造を持っているため厄介である。例えば、誰もが「空気」をおかしいと思っても、A・四字 を気にするあまり、自分だけ「『空気』に反する行動」をとることができない。しかし、何かのきっかけで「『空気』に反する行動」が「空気」に変化する場合がある。この変化を誰も B・六字 できない。このようなことが起こるため、厄介といえる。

問六 —— 線部⑤「『「空気」の研究』」について気になったとし子さんは、先生にすすめられて、鈴木博毅氏の『「超」

入門空気の研究』を読みました。次の会話は、本を読み終えたとし子さんと先生の会話です。本文の内容を踏まえて

(I) ・ (II) の間に答えなさい。

とし子：先生、鈴木氏は、空気はある種的前提で、絶対的な支配力を持つ判断の基準であると定義していました。そして、空気に支配された集団は、その前提からはみ出たものを受け入れない傾向があるそうです。

先生：なるほど。例えばどのような場合ですか。

とし子：戦時中、日本は竹槍戦術の練習をしていたそうです。上陸する米兵に見立てた人形を女性が竹槍で刺し殺す訓練をしたり、竹槍で爆撃機を撃墜するポーズの練習をさせられていました。そんな時、勇気ある人が「竹槍は爆撃機には到底届かない」という発言をしたのです。この人は「非国民だ」と非難されてしまいました。

先生：兵士や戦闘機を竹槍で攻撃するというのは、無茶な話ですよ。科学的に考えてもあり得ない話です。ですが、当時の日本は国家総力戦体制でしたから、戦争や戦術に関する事などに反対してはいけないという空気があったのでしよう。

とし子：私もそう思いました。それからこの本は、『訂正する力』の東氏とは、また違った<sup>ちが</sup>空気の定義をしていると感じました。東氏は、空気を a・十一字と定義しています。そして、人々が a・十一字に従ってしまう原因を b・五字があるからと述べていました。同じテーマでも人によって考え方・捉え<sup>とら</sup>え方が違うというのは興味深いです。

先生：その通りです。よく読み取れていますね。では、とし子さんに問題です。

(I) 次のア～ウについて、鈴木氏が定義した「空気」について述べたものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 京華小学校の三年生のクラスで、ハムスターを飼いたいという希望がありました。しかし先生は賛成してくれません。そこで「ハムスターを飼うことによるメリットとデメリット。また、デメリットの解決方法」をクラスの全員で考え、紙に書き出し、先生へ提出しました。

イ 京華女子株式会社で、社員旅行の希望調査が行われました。その日は、前々から家族で食事に行く予定だったのですが、社長から「社員旅行は全員行くものだよ」と言われたため、仕方なく参加することにしました。

ウ コンビニエンスストアでアルバイトをしている私は、年末年始は好きなアイドルの年越しイベントに行くつもりだったのですが、毎年、年末年始にも休まずにバイトをしている仲間のことが気になって、イベントをキャンセルしました。

(II)

a・b にあてはまることばを本文中からそれぞれ指定字数で抜き出さない。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ちなみに、『「空気」の研究』はいま読むと問題含みな本でもありません。刊行された当時、日本ではイタイイタイ病や自動車の公害が社会問題になっていましたが、山本は懐疑的注1でした。窒素ちっそ酸化物は有害か無害かわからないし、カドミウムも有害か無害かわからないのだと記しています。

当時「カドミウムは無害だ」と主張し、実際にカドミウム棒を舐めたな学者がいたらしいのですが、その話題に紙面を割いてきいます。『「空気」の研究』は古典ではありませんが、気をつけて読まなければなりません。

とはいえ、山本の議論がなにも参考にならないわけではありません。

山本は「水」について興味深いことを述べています。盛り上がり①に「水を差す」と言うときの「水」です。この国では、空気に水を差していたと思ったら、水を差すこと自体が空気になっていく。だからいつも空気と水が循環じゆんかんしている――。そんな議論で彼の本は締めくくられています。

これはじつは当時の左翼注2に対する批判です。「かつては軍国主義注3の空気があった。左翼は戦後そこに水を差すようになったが、しばらくしたらこんどはその水が新しい空気になって、言論が左翼に支配されるようになった」という話です。

『「空気」の研究』は半世紀前の本ですが、これはいまでも通用する指摘です。メディアでちやほやされる知識人が現実にはぜんぜん力をもたない現状は、おそらくこの空気と水の逆説ぎゃくせつに関係しています。

空気に抵抗ていこうしなければいけない。ルールチェンジをしなければいけない。そう主張するひとは多い。けれども、この国では、そのような主張（水）がそのまま受け取られるのではなく、すぐに「そういう主張をするひとが現れた」という新たな空気の問題として理解されてしまう。つまり、「『ルールチェンジをしなければいけない』と発言するという新しいルールでゲームをするひと」という受け取りかたをされてしまう。

そうすると、こんどはその新たな問題提起に考えなしに追随注4するひとが現れてしまう。いくら水を差しても、すぐそれが新たな空気になってしまいう構造があるわけです。ひらたく言えば、権力批判をしているひとこそ、空気を読むようになる構造がある。

これは重要な指摘です。空気は空気批判注1もすぐに空気に変えてしまう。日本の閉塞感注5の原因はそこにある。

だとすれば、そういった空気Ⅱゲームを変えるためには、空気から素朴そぼくに脱出だつしゅつしようとするのではなく、同じ空気Ⅱゲームのなかにいるようでないながら、ちよつとずつ違うことをやることによって、いつのまにか本体の空気Ⅱゲーム自体のかたちが変わってしまうといった注6、アクロバティックなことをやるしかありません。

言い換えればこういうことです。空気が支配し、水もまたすぐ空気になる日本においては、よかれ悪しかれ、ものごとは「いつのまにか変わる」ことしかありえない注7。明示的に「変えましょう」と言っても、その水注8自体が新たな空気を生み出してしまふからです。だとすれば、その「いつのまにか」をどう演出するかが課題になる。その課題に答えるのが、この本の主題である訂正する力なのです。

つまり、空気が支配している国だからこそ、いつのまにかその空気が変わっているように状況をつくっていくことが大事になる。注9

じつはこれは日本だけの話でもありません。この状況認識じつじきはジャック・デリダというフランスの哲学者てつがくが唱えた「脱構築だつこうちく」という考えかたに似ています。

【ア】哲学のかたちを「いつのまにか」変えてしまうという試みを、哲学の方法として提示した。

【イ】けれども彼はじつは、伝統的で保守的なルール注9に則のっとっているように見せかけつつ、それを深く追求していくことによ

って、ヨーロッパにおける哲学の型を根本的に変えてしまうといった試みをして、それが評価されているひとなのです。

【ウ】だからふつうはこういう文脈では言及されません。<sup>注10</sup> げんきゅう

【エ】デリダは、表面上はすごく難しい哲学書を書いている哲学者です。

【オ】そのようなデリダ的、あるいは「脱構築」的な手法は、日本においても実践的に有効だと思えます。<sup>じっせん</sup>

というよりも、日本では脱構築しか有効ではないと言うべきかもしれません。正面から既存のルールを批判しても力をもたない。ルールを訂正しながらも、その新しさを前面に押し出さず、「いや、むしろこっちこそ本当のルールだったんですよ」と主張し、現在の状況に対応しながら過去との一貫性も守る。そういうった<sup>エ</sup>両面戦略が不可欠となります。

注

(東浩紀『訂正する力』による)

- 1 懐疑的……ある物事に対して疑う傾向にあること。
- 2 左翼……社会主義、共産主義、無政府主義などの集団または人物。
- 3 軍国主義……軍事力の強化を国民生活の中で最上位におき、政治・経済・文化・教育をこれに全面的にしたがわせようとする立場や体制。
- 4 追随……あとについてしたがうこと。
- 5 閉塞感……閉じてふさがったように、先が見えない感じ。
- 6 アクロバティック……はなれわざのような様子。
- 7 明示……はっきりと示す様子。

8 脱構築……西洋哲学で伝統的に用いられる考え方を解体し、新たな考え方をつくつていこうとする思考法。

9 則つて……規準や規範として従う。

10 言及……話がそのことまでおよぶこと。

11 既存……すでに存在すること。

問一 【ア】く【オ】は文の順序が違っています。論理的に正しい順序にならびかえて、記号で答えなさい。ただし、【ア】は四番目にくるものとします。

問二 ——線部①「水を差す」の本文中での意味としてあてはまるものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人に調子を合わせて、上手に立ち回る。

イ 他のことに気をまぎれさせて、気分を落ち着かせる。

ウ わきから邪魔じやまをして、うまくいかないようにする。

エ 誰かを誘さそって、仲間に引きこむ。

オ 人をからかったりばかにしたりして傷つける。

問三 ——線部②「水」を言い換えた表現を本文中に求めるとどれになりますか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。なお、ア～エは本文中の〰〰線部ア～エに対応しています。

ア 軍国主義    イ 空気批判    ウ 状況認識    エ 両面戦略

問四 ———線部③「いつのまにかその空気が変わっているように状況をつくっていく」ために、筆者はどのようにするのが良いと述べていますか。その説明としてあてはまるものを、次のア〜オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ルールを訂正しても、新しいルールは前面に押し出さず、あたかも訂正したルールが本来のルールであったかのように主張し、現在の状況に対応しつつ、過去との一貫性も守る。

イ ルールを訂正する際は、過去のルールで生活している人々にとって不利益とならないように、「ルールを変えましょう」と声を掛け、意思表示をし、確認をとってから変える。

ウ ルールを訂正した後は、新しいルールで空気を支配するために、新しいルールと過去のルールとの変更点をまとめ、提示し、定着させる。

エ 仕方なくルールを訂正しなければならない時は、ひとまず訂正した部分は隠しておき、新しいルールが広まるまで、秘密にしておく。

オ ルールを訂正して新しいルールを広める場合、新しいルールについては詳しく話さず、過去のルールの欠点をあげ、このルールで生活すると損だと感じさせる。

問五 本文の内容にあてはまるものを次のア～キから二つを選び、記号で答えなさい。

ア 日本で公害が社会問題になっていった時代に刊行された『「空気」の研究』での山本の主張は、いま私たちが読んでみると問題だらけな本であるため、全く参考にならない。

イ カドミウム棒を舐め、その無害性を主張した学者が激痛に苦しみ亡くなったことを知っていたにも関わらず、山本は「カドミウムは有害か無害かわからない」と主張した。

ウ 「水を差す」こと自体が次第しだいに空気となっていくため、人々は常に空気に水を差し続けるように意識しており、そのおかげでいつも空気と水が循環している。

エ メディアでちやほやされる知識人が現実には力をもたないように、かつての軍国主義も論理の矛盾むじゆんがあるため、戦後左翼に支配されるようになってしまった。

オ 日本の閉塞感の原因は、空気に抵抗しようと人々がいくら水を差しても、差した水がすぐに新たな空気になってしまふところにあると、筆者は考えている。

カ デリダは伝統的で保守的なルールに従っている様子を見せながら、その一方で伝統について深く追求しているように見せかける試みで評価されている。

キ 哲学のかたちをいつのまにか変えてしまうようなデリダ的、あるいは「脱構築」的な手法は、フランスだけでなく、日本においても実践的に有効な方法である。





